

# チャンス・チャレンジ・チェンジ

秋田県立養護学校天王みどり学園 加賀谷 勝



## 子どもが変わるポイント

### 1 「個別の指導計画」を活用・共有している

- ・「個別の指導計画」を作成して、職員会議や学年部会で共通理解を図っている。学校によっては、共有ホルダーを利用していつでも見られるようにしている。
- ・ある中学校では、保護者と定期的にケース会議を開催している。特別支援教育コーディネーター、学年主任、担任、保護者、外部の専門家と情報交換を行っている。「個別の指導計画」を活用して、目標に対して生徒がどのように変容したか、変容につながった有効な手立てについて共通理解を図る。「個別の指導計画」は保護者と学校のズレを埋める大切なツールである。

### 2 特別支援教育コーディネーターが機能している、信頼されている

- ・特別支援教育コーディネーターを学校要覧に記載したり、PTA総会で紹介したりして校内に位置付けられている。(コーディネーターの存在を知らない保護者が多い)
- ・特別支援教育コーディネーターが、校内外の連絡調整、校内委員会の開催、支援員との連絡調整、保護者に対する相談窓口の役割を果たしている。また、活用できる校内外の資源をもっている。複数いる場合は、役割分担がしっかりできている。

### 3 管理職が特別支援教育を理解し、学校経営計画に明確に位置付けている

- ・校長の特別支援教育に関する考え方、個別の教育的支援を必要とする児童生徒の捉え方が、すべての活動に影響する。校内委員会が機能するように、校内のキーパーソンをコーディネーターに指名している。

### 4 学級が認め合う・助け合う雰囲気がある (子どもは友達との関わり合いで成長する)

- ・ある中学校では、ソフトボールの授業で、運動が苦手な生徒がバッターボックスに入ると、ピッチャーがホームベースに近付いてゆっくり投げる「特別ルール」がある。それは生徒の中から自然にできたもので、「当たり前ルール」になっている。

### 5 担任が子どものよいモデルとなっている、子どもを肯定的に見ている

- ・困っているのは子どもであるという考えをもっている教師は、授業でさりげない支援ができる、ケース会議で子どもを前向きに捉える発言が多い。担任が代わったら、子どもが変容することがある。教師は子どもにとって憧れの存在でいてほしい。

### 6 子どもが目的達成のために具体的な目標をもてる (自己理解・自己受容)

- ・進路を意識できるようになり、テストの点数が伸びたケースがある。高校に入るために(目的)、計画的にテスト勉強に取り組む(目標)。子どもは目的をもてれば、努力ができ、粘りがきく。同時に、「自己理解」を促すことも大切となる。

## 「やめない」こだわりへの対応例



○小学校の一場面▶本で遊んでいた小2男児。トイレに行く時も本を離そうとしなかった。

教師：「トイレに行くので本を置いてください。」子どもが奇声を上げる

教師：「トイレのあと、また本で遊べるので置いてください。」

納得するまで時間はかかったが、本を置いてトイレに行けた。トイレの後、また好きなことができることを伝え、毅然とした態度で対応できたことを参考にしたい。